

京都市立中京もえぎ幼稚園実践提案研究会 開催レポート

2019年6月22日（土）、2018年度「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園の京都市立中京もえぎ幼稚園主催による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。京都市教育長はじめ教育委員会学校指導課の方々、公立や私立の幼稚園・保育園・認定こども園、小学校、養成校の学生など、保育や学校教育関係者 約90名の参加がありました。

以下に京都市立中京もえぎ幼稚園による開催レポートを掲載します。

研究会概要

1. 日時：2019年6月22日（土） 9：30～16：30
2. 会場：京都市立中京もえぎ幼稚園
3. 主題：「科学する心を育てる」
～好奇心や探究心を育むための環境構成、保育者の援助を考える～
4. プログラム
 - 1) 公開保育 9：30～11：15
 - 2) 開会式 12：15～12：25
 - 3) 実践発表 12：25～13：00
 - 4) 協議会 13：00～14：00
 - 5) 指導講評 14：00～14：30
 - 6) 記念講演 14：45～16：25
 - 7) 閉会式 16：25～16：30

公開保育

< 3歳児 >

保育室のウレタン床上積木を使い、保育者と一緒にイメージをもちながら乗り物を作って遊んだ。新聞紙を輪にした物をハンドルに見立てて運転したり、紙を丸めるちぎるなどしてペットボトルに詰めジュースに見立てたりして、作った乗り物で遊ぶことを楽しむ姿があった。

また、帽子やリュック、望遠鏡を身に付けて保育者や友達と5歳児がしている「ゆめランド」などに出かけて遊んだ。「ゆめランド」では巧技台の梯子を渡ったり、段ボールに乗りすべり台を滑る“ジェットコースター”に乗ったりして遊ぶことを楽しんだ。また、「デザート屋」で好きなデザートを注文したり、人魚にダンスを見せてもらったりして、保育者と一緒に5歳児とのかかわりを楽しむ姿もあった。

園庭では、4歳児が泥でピザを作っているのを見て興味をもち、泥でハンバーグを作る姿があった。4歳児の様子をじっくりと見て、こてを使ってハンバーグを焼き、さら粉をかけて花などでトッピングして皿に入れていた。

様々な遊びの中で、自分のイメージをもって遊んだり、素材にふれて自由に試したりして遊ぶことを楽しんでいた。また、保育者や5歳児との触れ合いを喜ぶ姿もあった。



< 4 歳児 >

樋をつないだ水遊びや泥遊び、泡遊び、忍者のごっこ遊びを保育者や友達と一緒に楽しんだ。

水遊びでは砂場の玩具などで高さを調節しながら樋をつなぎ、水が流れる様子を見て喜んでた。水が流れるようになると、ペットボトルの蓋や丸い玩具、ペットボトルなどを流すことを楽しんでた。また、水が流れてできた泥の感触を楽しみながら樋を泥で堰き止め、水が流れなくなる不思議さを感じている姿も見られた。泥遊びでは泥のトロトロの感触を感じながらごちそうに見立てたり、泡でごちそうに飾り付けをしたりして自分なりの試しを楽しんでいた。

室内では忍者のイメージをもって保育者や友達と遊ぶことを楽しんでた。床上積木で屋敷を作ったり、忍者の衣装や頭飾りを身に付けて友達とのやり取りを楽しんだりする姿が見られた。手裏剣を的に当てる修行では、繰り返し試しながら投げ方や手裏剣の形を工夫していた。

保育者や友達と同じ場で遊ぶ中で、自分の思いを受け止めてもらうことで、自分なりの試しを繰り返し、新たな試しが生まれる様子が見られた。



< 5 歳児 >

自分の船を作ったり浮かべたり、滑らせたり、海の世界をイメージしてごっこ遊びをしたりすることを友達や保育者と共に楽しんでた。

船作りの遊びでは、アクリル板の滑り台で船を滑らせて遊んでいた。船が滑り台に貼り付いてしまうと、滑らせるための方法を友達と一緒に考える姿があった。お互いの考えを伝え合い、試したり失敗したりを繰り返しながら、「滑らせたい」という“ねがい”を叶えようとする姿があった。また、船にゴムプロペラを付け、船を動かしたり友達の船と競争したりすることを楽しんでた。また、水の力や風の力を使って、船を動かすことを試す姿、作った船をさらに進化させようと工夫する姿も見られた。

「海の世界のごっこ遊び」では、人魚になってダンスをしたり、音楽に合わせて楽器を演奏したりすることを楽しんだ。人魚になった子どもたちは、手作りの衣装を身にまとい、音楽に合わせて自分なりのダンスを踊ったり、友達と息を合わせて踊ったりと工夫しながら遊ぶ姿が見られた。また、お客さんに見てもらうことに喜びを感じ、宣伝したりチャイムで始まりの合図をしたりとお客さんを集めることやお客さんが楽しめるような演出を考えることを楽しむ姿があった。



実践発表

「好奇心や探究心を育むための環境構成、保育者の援助を考える～科学する心に視点をあてて～」を主題に、昨年度の論文より、取り組みを報告した。初めに、本園の実態から、「科学する心」についての考え方と取り組みのテーマについて述べた。次に、遊びの中の子どもの心の動きを読み取った事例を挙げ、子どもたちの好奇心をもち探究している姿を、「繰り返すことで新たな試しが生まれる4歳児」「目的を共有して探究が深まる5歳児」と、捉えたこと、「心の動きからみる好奇心や探究心の育ち」「環境構成や保育者の援助」などについて報告した。さらに、学校運営協議会や地域等のつながりからゲストティーチャーを招いて「ほんまもの」の体験をすることで子どもたちの豊かな遊びを創り出し、好奇心や探究心を育むことにつながることや、小学校との連携より捉えた好奇心や探究心の連続性について報告した。

協議会

グループ協議は、研究主題「好奇心や探究心を育むための環境構成、保育者の援助を考える～科学する心に視点をあてて～」をもとに以下の3点の視点に沿って進めた。

- 子どもたちが科学している姿とは？
- そのための環境構成とは？
- 保育者の援助とは？

参加者が公開保育を参観して感じた「いいなと思った環境と保育者の援助」「よりよくするために環境と保育者の援助の改善点」についてそれぞれ付箋紙に記入し、少人数のグループで互いに発表し合い共有した。

<協議内容から抜粋>

○子どもの姿

- ・保育者や友達の様子や周囲の環境を見て、「楽しそう」と遊びに入っていく姿があった。その中で、5歳児や4歳児の姿を見て刺激を受けていた。(3歳児)
- ・水遊びで、樋の並べ方を工夫したり、並べ方を変えることで水の流れの違いに気づいたりする姿があった。(4歳児)
- ・船を滑らせようとする中で、失敗の原因を考えたり、繰り返し試したりしていた。(5歳児)
- ・保育者の問いかけに対し、自分の疑問や考えを言葉にして確認する姿が見られた。(5歳児)

○環境構成

- ・アイデアを膨らませるような材料や道具が豊富に用意されていた。
- ・砂の種類を分けて表示していたり、自然物の作品も写真で記録して残せるようになっていた。
- ・忍者ごっこなど、なりきって遊ぶ衣装や小道具が充実していて、共通のイメージや遊びを楽しむ姿につながっていた。

○保育者の援助

- ・保育者も一緒に遊びに入ることで、イメージが広がり展開していく姿があった。(3歳児)
- ・子どもの思いや願いを一緒に考え実現しようとかかわっていた。(4歳児)
- ・子どものしたいことを受け止め、ヒントを出したり、周囲の子どものアイデアを知らせたりする援助があった。(5歳児)
- ・次への目的をもたせる声かけがされていた。(5歳児)

それぞれのグループで、活発に意見が出された。具体的な場面をもとにしての意見交換に、様々な就学前施設の教員や学生など様々な立場から、いろいろな意見があった。主題に迫る協議の深まりが見られ、今後の保育に活かしていくことができる視点がたくさんあり、学び多きものとなった。

指導講評

古賀松香氏 / 京都教育大学 准教授

「京都市立中京もえぎ幼稚園の実践と研究」を演題に、京都教育大学准教授 古賀松香氏に指導講評をしていただいた。

本園の教育について「徹底的に子どもを受けとめる」、「子どもの心を育もうとする」、「人との関係の中での育ちを大切にする」という特徴をお話していただいた。2018年の研究については、子どもの普段の遊びを3つの資質・能力と心の動きで分析したこと、地域との連携・社会に開かれた教育課程の実践、そして幼児期に育まれた資質・能力について小学校においても着目したことに触れて解説された。

昨年度の事例をもとに、ちょっとした難しさがあることでじっくりとやり続ける姿が生まれ、その中でやり方を変え、物との関係を変えることにつながっていくことを教えていただいた。また、具体的な状況の中で比較することによって、「具体的な物、動的な状況の中で感知し、予測し、確かめ、さらに物を動

かして考えていく」というサイクルが生まれるという話も述べられた。

子どもたちは驚き惹かれることで先入観なく自由に科学する心をもっていること、そしてその姿に大人が誘われる場合もあることなどから、幼児らしい自由な発想で何度も試せる環境の大切さについても教えていただいた。

今後の研究に向けて、科学する心をどう描くかについてもご指摘いただいた。使用している道具や素材がわかるような資料提示や、子どもの行為や発話、動機と行為のプロセスについて具体的に記述することで、読み手に伝わるように科学する心を描写していくことが重要であると述べられた。また、これまでの研究は子どもの姿の読み取りが人間関係に偏りがちであることを指摘され、子どもが何に気付き感知しているのかを具体的行為・発話から探ることをご提案いただいた。

子どもの自由な科学する心を育むためには、大人の科学する心を耕すことも重要であると述べられていた。保育プロセスの中でふと生まれる子どもの気付きをどう深めるか、どこまで焦点化するか、どこまで言語化・視覚化・整理・精選するかが課題となることも教えていただいた。そして、今後の研究への展望として、園文化の一つである異年齢のかかわりと科学する心の育みも研究課題の一つであると示していただいた。

記念講演

猿田祐嗣氏 / 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 基礎研究部長

「気付き、考え、伝える活動を通して育む科学の芽」を演題に文部科学省、国立教育政策研究センター、基礎研究部長（併）初等中等教育研究部長 猿田祐嗣氏にご講演いただいた。

教育要領の改訂に伴い、学校教育が変革期をむかえている。これからの社会で求められる資質・能力とは何か、そして、小・中学校の教育はどのように変わるのかについて、幼児教育と結び付けてお話しいただいた。さらに、子どもたちが未来を生き抜くために求められる力についても詳しくお話いただいた。

まず、理科教育の根っこは幼児教育にあるということを示され、そして、幼児が主体的な遊びや先生や友達との集団生活において、5官（感）を働かせた体験をすることが大事であると述べられた。そして、5官（感）を働かせた様々な体験を基盤に小学校生活科での自然の事物や現象に直接触れ親しみや興味をもつ活動の中で、疑問や興味を伴った経験を積み重ねていく。さらに、それらの経験が理科教育における科学的な思考力、判断力、表現力を育成するための問題解決の過程とその位置づけ、見方、考え方を働かせた活動の基盤となる。幼児教育、小学校生活科、理科教育のつながりをふまえ、根っことなる幼児教育が重要であることを教えていただいた。

さらに、現代社会の変化に応じて付加される能力が変化し、それに伴い学校の役割も「暗記型学習」から「知識創造型の学習」へ、「教え込み型教育」から「支援型教育」へ変化している。そして、学校がこのような役割を担っていくために、資質・能力の確実な育成、資質・能力を育むための主体的・対話的で深い学び、資質・能力の確実な育成を行うカリキュラム・マネジメントをポイントとする小・中学校指導要領の改訂が行われた。また、21世紀を生き抜くための資質・能力の3要素として、「基礎力」「思考力」「実践力」をあげられ、これらの3要素と教科等の内容を学習活動でつなぐ教育が有効である。つまり、主体的協働的な学び（アクティブラーニング）を通して、資質・能力が生まれ、それを支える教育環境の整備（カリキュラム・マネジメント）が重要である、と述べられた。

幼児教育は就学前教育ではなく、これからの社会で求められる資質・能力は幼児期から育まれる。そして、科学の芽は幼児の遊びの中で育まれる。知識や技能も大切であるが、教科書的な知識ではなく、自分の身近な事象と関連させるなど、実体験を通して生まれた問いに対して「思考力」で問題解決することが大切である。つまり、幼児期から主体的協働的な遊びを通して5官（感）を働かせながら得た様々な体験の中で幼児自ら問いを見つけ、深く考える過程で思考力が育まれる。また、遊びや生活の中で問いが生まれる実体験や問いを引き出す環境構成や保育者の援助が幼児期においても重要である、と教えていただいた。